



レミニセンティア

РЕМИНИСЦЕНЦИЯ

日本人監督がロシア SF 映画を作りだした！

井上雅貴 監督 シネマ & トーク

忘れたい記憶がありますか？

取り戻したい記憶はありますか？

あなたの記憶は真実ですか？

日本映画史上初となる全編ロシア語の SF 映画『レミニセンティア』。スタッフはわずか3名、ロシアでのオールロケ、商業映画に引けを取らないクオリティ……一体どうやって？

この驚異の SF 映画を撮影したのは、本作が初監督作となる井上雅貴監督。巨匠アレクサンドル・ソクーロフ監督の『太陽』にスタッフとして参加し、ストーリーの作り方はもちろん、カメラワークやライティングなど映画作りのすべてを学んだ。記憶をテーマにした哲学的でありながら、親子の愛、そしてエンターテインメント性も持ち合わせた本作には、まさにソクーロフの映画術が生かされている。

フォーラムでは井上監督をお招きし、この映画ができるまでのプロセスや裏話、敬愛するソクーロフの映画術などたっぷりとお話いただきます！

9/1
(金)

フォーラム山形

18:30 ~ 上映

20:00 ~ トークショー

9/2
(土)

フォーラム仙台

10:00 ~ 上映

11:30 ~ トークショー

仙台のみ 9/2(土) ~ 9/8(金) 通常上映

9/2
(土)

フォーラム福島

14:00 ~ 上映

15:30 ~ トークショー

前売券 1,000 円、各劇場窓口にて販売中

当日料金 1,200 円

(各種招待券はご利用いただけません)



STORY

ロシアのとある街、小説家のミハエルは愛する娘ミラーニャと二人で暮らしていた。彼ももとは日々、悩める人々がやってくる。

「私の記憶を消してほしい」

ミハエルは人の記憶を消す特殊な能力を持っており、小説のアイディアは彼らの記憶をもとにしていた。そんなある日、娘との思い出の一部が欠けていることに気づく。過去が思い出せず、悩み苦しむミハエルは教会に行き神に祈る。すると、見たものすべてを記憶する超記憶症候群の女性マリアに出会う。忘れることができない病気に苦しむ彼女だが、記憶を呼び起こす能力を持っていた。ミハエルは彼女に取引を持ちかける。

「あなたの記憶を消すかわりに、娘との記憶を取り戻してほしい」

記憶の狭間へと落ちてゆくマイケルは、そこで衝撃の真実を知ることとなる。

レミニセンティア

РЕМИНИСЦЕНЦИЯ

監督・脚本・撮影：井上雅貴

プロデューサー：井上イリーナ

出演：アレクサンダー・ツィルコフ / 井上美麗奈

ユリア・アサードバ / イリーナ・ツィルコバ

2016 / 日本 / 1h29

井上雅貴 監督 プロフィール

1977年、兵庫県生まれ。

日本工学院専門学校映画科にて16mmの短編映画を製作し始める。卒業後、MVビデオ、CM、TV番組などのディレクターをつとめ、2005年に有限会社INOUE VISUAL DESIGNを設立。

映画編集として石井岳龍監督の『DEAD END RUN』『鏡心』に参加。アレクサンドル・ソクーロフ監督のロシア映画『太陽』にメイキング監督として参加。3ヶ月ロシアに滞在し、ロシアの映画製作を学ぶ。ロシアでの撮影を決意し映画企画を進めるなか、内容、撮影ともに商業映画の企画として難しいため、自主制作を決意。いままで参加した映画の知識をすべて使い映画を完成させる。

今回が初長編映画デビュー。



監督 メッセージ

10年以上前、映画メイキングとしてアレクサンドル・ソクーロフ監督の映画「太陽」に参加しました。今まで日本の撮影しか知らなかった私には、衝撃的な出来事でした。すべてのスタッフが美的センスを持ち、アシスタントの子でも監督に意見できる環境、自分の担当部署じゃなくても、他の部署の議論をしあう。映画文化をリスペクトし、良いものを作りたいという気持ちが表れていた撮影現場でした。私も少なからず映画に携わるものならば、いつかは監督したいと考えていましたが、作るならクオリティ、内容ともに高度なものをと考え続け、時間が過ぎて行きました。日本で映画を撮るということも考えましたが、自主映画では納得するクオリティが保てると思えず、初監督するならスケール感があり、エンターテインメントなものを撮りたいと考え、ロシアでの撮影を決意しました。海外での自主映画、不安はいっぱいでしたが、制作体制、機材の選定、シナリオ、事件が起きた時の対処まで考え抜き、撮影を敢行しました。ロシア人の役者たちに相談するため、劇場に行ったところ、私も出演したいと言いつぐらい協力的で、街の人たちも撮影場所を提供してくれたり最初シネリオで想定していた規模をはるかに越えた撮影となりました。それはすべて映画文化ということに対するロシア人のリスペクトがあるからです。映画関係者だけでなく一般人も映画に尊敬の念を抱いているのです。文化レベルが高いというのはこういう事かと痛感しました。この映画はロシアでなければ成立しない作品です。自主制作で作られた作品ですが純粋に映画として楽しめるクオリティに仕上がりました。この映画をみなさんが楽しんでいただき、ロシアに少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

